フレーゲル男爵転生

大同亭鎮北斎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めると、フレーゲル男爵だった。架空戦記分多めで描く「フレーゲル男爵に現代人が転生したら」のｉｆ世界。今回も右往左往七転八倒しながら生存を目指します。

毎日１７時更新。

目次

クロプシュトック事件 ―― 1
クロプシュトック討伐軍編成 ―― 5
北門門外事件 ―― 10
ティアマト防衛作戦 ―― 15
西苑にて ―― 20
二人の英雄 ―― 24
近衛司令部反乱時鎮圧計画 ―― 29
第八次イゼルローン攻防戦 ―― 35
一〇月一〇日事件 ―― 40
ヨアヒム・フォン・ブラウンシュバイク伝 ―― 46

クロプシュトック事件

帝国暦四八六年三月二一日　ブラウンシュバイク公爵オーディン邸

熱と痛みで目を覚ました。

意志の力でそれを押し殺し、体を起こす。周囲では炎と肉片と煙とが宴を繰り広げていた。焼き鏝を押し付けられたような右のこめかみを触ると、手にべっとりとねばつく赤黒い液体がこびりついた。

宴、というのはまんざら比喩でもない。どうやらここは壮麗なパーティー会場「だった」ようだ。周辺には燕尾服や詰襟を着た肉塊が散らばっている。焼け焦げたタペストリーには赤字に黄金の樹が刺繍されていた。

とにもかくにも、悪趣味な夢である。夢分析などすればさぞ欲求不満と言われることであろう。白布（おそらくはテーブルクロスだろう。誰かのシャツではないことを祈りたい）を破り、丸めて頭へと押し当てる。周囲に生存者はないようであった。圧迫止血をしながら混乱する思考をまとめようとする。

私はたしか、雪の降りしきる中、ストーブへ注ぐ灯油を取りに行くべく炬燵を出たところであるはずだった。直後胸の痛みを感じ――気づくとここで、痛いのは頭に変わっていた。そして服は着替えさせられ、周囲の人々（だったもの）の中に混じる服と同じ詰襟を着ている。このような服を着るのは学生時代以来のはずであったが、私は以前とは大分体格も変わったようで、服はフィットしている……

「若様！　ご無事で！」

こちらへと詰襟の中年白人男性が近づいてくる。なるほど、これは学生服ではなく軍服であるようだ。若様とは私のことのようで、そうなるとここはドイツ文化圏であると思われる。ドイツ文化圏で詰襟軍服を纏って爆発に巻き込まれているとなると、一九か二〇世紀のドイツ諸邦ないしはドイツそのものの軍人であろう。転生ないしは憑依というわけである。彼が下手に出ていることを考えれば高級軍人か貴族。これが夢でないならば、どちらにせよ「私」に待つのはろく

な未来ではあるまい。陰鬱な気分になる。
「どうされました……？」
「いや。少し混乱していてな……何が起きたのだ……？」
「は。どうやらテロですな。下手人はおそらく共和主義者かと……公爵閣下の姿は爆発直前にみられませなんだか？」
　周囲をうかがいながら彼が聞く。共和主義者のテロとなると、帝政時代であるようだ。ほぼろくな人生を送れないことが決定したと言っていい。さておき公爵となると随分な大人物であるが、それが見つかっていないのであれば一大事である。私が爆発前に公爵とやらの近くにいたとなると、閣下は現在この周囲を染める赤い絵具の一部を為していることとなってしまうが。
「すまぬ、思い出せぬのだ……」
　記憶がないとはいえ今生の知人が血煙と化す姿を覚えていないのは、かえって幸運といえるかもしれない。
「左様でございましたか……医師の手当てを受けましょう」
「私も軍人だ。怪我は軽いゆえ、生存者の救出を手伝わせてくれ。君こそ怪我は……」
「……!?」
　ぎょっとした顔で彼が固まる。それほどに私のけがは重く見えるのだろうか。この痛みといい、登場人物の重厚さといい、どうやら単なる夢ではなさそうである。であるならば、より多くの人を救うべきだろう。
「どうした？」
「い、いえ。このアンスバッハ准将、怪我はございませぬ」
　見事な敬礼をアンスバッハ准将がかえす。こちらも敬礼しようとして、右腕がふさがっていることに気づいた。頷き、さらに白布を引き裂くと、准将はそれを私の頭へと巻き付けた。流石は軍人といったところで、救命救急にもたけていると見える。
「ありがとう。では捜索を再開しよう」
「は!!」
「ブラウンシュバイク公！　ブラウンシュバイク公はいずこか！」

アンスバッハ准将は大声で呼びかけながら、まだ人体の構造をとどめている人々を助け起こしていく。しかしその大半は形をとどめていても、その機能は不可逆的に失われていた。こうなってくると頭に軽傷を負ったのみであるところの私は随分と幸運であったように思われていく。

「ラインハルトさま！」

煙の中から現れた赤毛の若手士官が叫びながらすれ違おうとする。その肩をつかむと、焦りの混じる表情で睨まれた。その表情は殺気混じりであり、たじろぎそうになる。しかし、死にかけたことにより胆力を身につけたか、それとも前世を入れれば「死んだ」ことにより余裕ができたか、こらえることができた。そうだ。この赤毛こそ余裕がないのであろう。落ち着かせるべく、ゆっくりと事実を口にする。

「そちらには肉片しかないし、煙が充満していて危険だ。探すならば他を」

「……っ。これは失礼いたしました」

「うん」

言われ、彼は少し落ち着きを取り戻したようで、周辺を見渡しながら煙の少ない方を選んで歩いて行った。

「……驚きましたな。若様がかの者へあのようなお言葉を」

「うん？」

アンスバッハ准将に言われる。はて、何か妙なことを言ったであろうか。もしや敵対派閥に属する相手なのか。軍高官ともなれば派閥争いもあろうが……記憶をたどると、あの青年に対する侮蔑の情が思い出される。

「このような事態なのだ。遺恨を引きずるべきではあるまい」

誤魔化すべく言うと、准将は一瞬呆けたような顔をした。一体「私」はどんな人間であったのか。どうもろくなものではない気がする。

「さあ公爵を探さねばなるまい」

「は……！　ブラウンシュバイク公！　ブラウンシュバイク公はいずこか！」

「アンスバッハ、アンスバッハ、わしはここだ……早く早く、助けてく

れ」
　弱々しい声のする方へ向かうと、脚を柱に挟まれた大柄な男性が、煤にまみれて横たわっていた。幸いにも生命としての機能は保たれており、またすぐに失われるということもなさそうである。
「閣下！」
「伯父上、ご無事ですか！」
　自分が出した声に驚く。そうだ、ブラウンシュバイク公爵オットーは私の伯父である。実在の人物としてより、物語の登場人物として聞き覚えのある名前だ。強いて意識しないようにしていたが、アンスバッハ准将も記憶にある。なれば、私は、私は……
「おぉ、ヨアヒム！　おぬしも無事か！」
　ヨアヒム・フォン・フレーゲル男爵。
　そう気づいた瞬間、頭のなかに今生の記憶が滝のように流れ込んでくる。貴族らしく優雅であり夭逝した父、父代わりとなった優しくも厳しい伯父、美しく可憐な従妹、無気力で酒色に溺れる皇帝、皇帝の寵姫の弟として成り上がる美形の金髪、その従者で平民の赤毛（ついさっきも会った）。
　両脚の力が抜け、身体が後ろへと倒れこむ。
　最後に頭に浮かんだのは「余命二年」という言葉であった。
　皇帝臨席によるブラウンシュバイク家オーディン邸の晩餐会は凄惨なる事件現場となり、そこからは四十人に上る大貴族が自宅へ帰ること能わず、ヴァルハラの門をくぐることとなった。幸いフリードリヒ四世は腹痛により出席を取りやめていたが、これが皇帝を狙った爆破テロであったことは明白であり、直ちに憲兵隊・国家警察・社会秩序維持局が捜査を開始することとなる。
　警備担当であったメックリンガー准将から「忘れ物をして退出したのはクロプシュトック侯爵のみ」であるとの情報提供がなされ、官憲がクロプシュトック侯爵オーディン邸へ押し寄せるが時すでに遅く、侯爵は自家用船に飛び乗り遠く光のかなたの領地へと姿を消していたのであった。

クロプシュトック討伐軍編成

帝国暦四八六年三月二二日　ブラウンシュバイク公爵オーディン邸

「ヨアヒム、委細は聞いたな？」

政治的にも物理的にも巨大な男、わが伯父オットー・フォン・ブラウンシュバイクが執務机の向こうから問いかける。その背後では未だ庭に面した迎賓館が燻っていた。周囲は黒い詰襟と鈍色の甲冑姿が囲んでいる。あれが装甲擲弾兵であると今生の記憶から理解はできるが、どうにも時代錯誤に見えて仕方なかった。

「はい伯父上。この度の事件はクロプシュトック『元侯爵』によるものであり、クロプシュトック家は取り潰し。伯父上が上級大将として現役復帰の上、領地討伐の指揮をとられると」

「いかにも、その通り。昨晩陛下のもとへ参上し、その旨勅命いただいた」

自宅での夜会をあれほどの惨事へ変えられた当事者である。となればその不名誉を雪ぐべく討伐軍司令官となるのも不自然なことではあるまい。伯父上は予備役上級大将、敵手たるクロプシュトックは予備役大将と格としても十分釣り合う。もっとも両者ともに実戦経験は皆無に等しいが……

「そしてその功で元帥へ昇進すれば、軍内でのわしの地位も確たるものとなろう」

この頃皇帝は酒色により健康を損なっていると宮廷雀達の専らの噂であった。クロプシュトック元侯爵が貴族社会から離れて長かったため、そうとは知らず暗殺を企てたのは喜劇であるか悲劇であるか、判然としない。

どちらにせよ、後継者指名がない今、先を見据えれば軍部への影響力拡大は必須である。となれば誰にも付け入る隙を与えぬ形での武勲が必要だ。

「であらば不祥事のなきよう、若手を締め付ける必要がございますな。大逆人となったからにはクロプシュトック侯爵の領地領民は陛下の

ものですから、徒に略奪暴行など働けば政府に付け入る隙を与えることになりかねませぬ」
「う、うむ……随分と理解が早いな？」
「お褒めにあずかり光栄です伯父上。のちに従妹の直轄地となる地を害するようなこと、このヨアヒム・フォン・フレーゲル決して許しませぬとも」
「あぁ。そうであるな」
　忘れがちではあるが、従妹にして伯父上の娘、エリザベート（今生の私は親しいようであり、彼女には「にいさま」と呼ばれているようだ）は帝位継承権二位。女帝の座に座ることは十分ありうるのである。とならば今上帝に一旦預けたとて、結局転がり込んでくる……とまあこういった理屈もたつ。元帥杖と、娘の利益。これがあればブラウンシュバイク公爵は略奪を許すまい。
　こうすれば大義名分を立てつつ、双璧との敵対を避けることもできよう。かの二人と対立し害そうとすれば、下手をすると金髪が暴走機関車になって突っ込んできかねない。それを避けるには軍規を徹底させるに尽きる。目覚めてから必死で考えこの結論に至った（が、どうも反応を見る限り公爵は理解しており「私」を含めた青年貴族たちが暴走したようである）
「アンスバッハから聞いたが、おぬしは随分と一夜にして成長したようだな。男子三日会わざれば刮目して見よとは言うが、どういった心境の変化だ」
　伯父上が頭を見ている。まぁ確かに怪我の処置を理由に「貴族らしい」ヘアスタイルは短髪へと変更した。しかしそういう話ではあるまい。
「伯父上。我が友たちは、何れもゴールデンバウムの藩屏たる名士たちでしたが、昨日私を守り命を散らしました」
　前世の記憶が強すぎ、その基準に照らせば貴族のドラ息子どもとしか言いようのない体たらくであったが、少なくとも今生の友人たちではあった。さらば友たちよ。従者に鞭打ったりするのは人としてどうかと思うけれど、いい友人ではあった……あったかな？　あやしい

かもしれない。しかしながら名目だけは友人としよう。
「喪われた彼らに恥じぬよう、家門に恥じぬ行いを心がけようと考えたのです」
「うむ……うむ……！　立派だ！　さすが我が甥！」
　味方を撃つに躊躇のないリッテンハイム侯爵と比べ、伯父上はどうにも大貴族としては甘い。もちろん人としては美点であるが、権門の当主としては些か人情的に過ぎると言えよう。ゆえに、本来敵視しても構わぬはずの弟を大切にし、その息子たる「私」にも愛を注いだ。ありがたいことである。その甘さゆえに青年貴族たちの暴走を許したが「私」が私となったからには、この恩に報いるためにも、可愛い従妹の未来を絶たぬためにも、そして自分自身の生存のためにも、愚か者に飴をもち望むつもりはない。
「おぬしも現役復帰し参謀長として同道してもらう。今のおぬしならば任せられよう」
　そこはアンスバッハやシュトライトではないのか、と思わなくもない。しかし確かにこの時点では「予備役」の前置詞が取れればブラウンシュバイク一門の中で公爵本人に次ぐ階級を誇るのはこの私、フレーゲル予備役少将である。
「いかに我らが誇り高き貴族であると言えど、軍事に関しては階級相応の差配ができぬのは事実として認めざるをえぬ。それはわかるな？」
　よくわかる。私に将器などあろうはずもない。こちとら令和年間を生きていたのである。しかも正規軍はさておき、残りは貴族私兵の連合軍……歯に衣着せぬ物言いをすれば、烏合の衆である。
「恥ずかしながら、私もまさしくそこに不安がございました」
「……うむ」
　ブラウンシュバイク公は拍子抜け、という具合の表情を見せる。反発や大言壮語の一つでもしてみる方が「私」らしいかとも思うが、そうして「私」らしさを貫いた末路を知る身としては向こう見ずにはなれない。
「ゆえに、戦闘技術顧問を帝国正規軍より招聘することとなった。ア

ンスバッハ、御両名をお連れせよ」
「御意」
　アンスバッハが隣室へ退き、すぐさま少将の階級章を付けた若者二名を引きつれ部屋へと戻った。蜂蜜色のくせ毛の好青年と、濃いブラウンの髪にヘテロクロミアの美男子である。両名とも、前世で憧れた英雄であると一見して分かった。思わず立ち上がり、先に敬礼をしてしまうのも致し方ないことだ。
「ウォルフガング・ミッターマイヤー少将、オスカー・フォン・ロイエンタール少将両閣下とお見受けいたします。参謀長を拝命いたしました、ヨアヒム・フォン・フレーゲル少将であります」
　ミッターマイヤーはやや慌てて、ロイエンタールは優雅に答礼する。
「む。ヨアヒムは両名と面識があったか？」
「いえ。しかしご勇名はかねがね。両閣下からご指導いただけること、このフレーゲル感激の極みであります。正規軍ほどの練度はない私兵が多い編成となりますが、伯父上のため、そして陛下のため私も軍規を徹底いたす所存です。何卒よろしくお願いいたします」
　ミッターマイヤーは貴族将校たる私に礼を払われたからかやや居心地が悪そうな表情を浮かべている。ロイエンタールは片眉を釣り上げていた。内心面白がっていることであろう。武功に必死の滑稽な姿と映っているかもしれないが、二年後の死を避けるためであれば外聞など知ったことではない。アンスバッハとブラウンシュバイク公は目配せしあい首をかしげていた。お気持ちはお察しする。
　この二人の指示に唯々諾々と従っていればクロプシュトック私兵など鎧袖一触であるだろう。なにせミッターマイヤーに至っては作中で「自分に指揮権を与えれば三時間で攻略してみせる」などと宣ったのである。お手並み拝見といくべし。私は私兵を伯父上の威光で締め付けるのみである。高みの見物といこう！
　この対面の一週間後となる三月三〇日、帝国正規軍を中核にブラウンシュバイクら門閥貴族の私兵を糾合した艦隊はなんとか編成を終え、艦列を整えて帝都オーディンを発しアルテナ星系へのジャンプポ

イントへ向かった。フレーゲル参謀長がめいいっぱいにブラウンシュバイク公爵の威光を重ね着した結果、討伐軍は一応なりとも正規軍並みの艦列を維持していたが、門閥貴族の間では不満が渦巻いていた……

北門門外事件

帝国暦四八六年四月五日　リンベルク・シュトラーゼ地区クーリヒ家

『ええ、グリューネワルト夫人はご健勝であらせられるわ』

ヴェストパーレ男爵夫人がＴＶ電話越しにアンネローゼの無事を確言する。昨今ベーネミュンデ侯爵夫人が宮廷内でアンネローゼに害意を抱いているという噂が広がっている。無論根も葉もないことである可能性も皆無とはいえないが、数度にわたりラインハルト自身の暗殺をもくろんだベーネミュンデ夫人のことである、事実である可能性は高かろうと金髪と赤毛は見積もっていた。

そのため、こうして時折姉の宮中における友人へと安全を確認しているのだ。なにせ、美貌を使って成り上がり、弟を出世させて傾国を為さんとしている妖婦と誤解されている（その実、ラインハルトの野望を鑑みれば全くの誤解とは言えないのではあるが、少なくとも本人にその意思はない）アンネローゼである。宮中に味方といえるのは烈女ヴェストパーレ男爵夫人、善良なシャフハウゼン子爵夫人、そして執事たるコルヴィッツとその妻程度のものであった。過去に軍内に送り込まれた暗殺者と異なり、宮廷内とあっては直接守ることもできないのが、ラインハルトにとってはもどかしいことであった。

一安心したところで、男爵夫人は話題を転じる。

『ご存じ？　例の討伐軍は既にクロプシュトックを降したそうよ』

「ほう。あの寄せ集めの艦隊で、ですか。少し意外ですね」

ラインハルトは閑職に置かれ、軍務省への出勤も義務付けられていない怪しげな地位にある。階級を駆け上がるごとき出世速度であり、同世代の知己もないことが情報収集を容易ならざるものとしていた。

正規軍と貴族私兵による臨時編成の大部隊となれば、その実質は烏合の衆であること疑いなく、相応の覚悟で私兵を訓練し傭兵を揃えたうえで反乱を起こしたであろうクロプシュトック軍に敗北することはないにせよ苦戦程度は必至であると考えていた。半月程度は鎮圧に要するであろうとの見立てであったが。

『司令官のブラウンシュバイク公が命令系統の順守を厳命して、甥御の参謀長が正規軍の戦闘技術顧問の指導を忠実に実行させているそうね。伯父の威光を笠に着てるって、若手貴族たちにはたいそう不評なようだけれど』
「フレーゲル参謀長が」
　あの男、公爵の威を借る狐であるとはいっても、どうやら優秀な者の指導助言の類を受け入れるという、門閥貴族相応の器量は備えているようである。ただ暴走するだけの馬鹿ではなかったか。
『なんでも、命令違反で略奪暴行を働いた一門の貴族士官を射殺したとかいう話よ。「公爵閣下の命に背く一門衆など害毒にしかならぬ」って。仇討ちをしようとした貴族将校も出て最終的には戦闘技術顧問の返り討ちにあったそうだわ』
「おくわしいですね」
　愁眉が吊り上がった。これは醜聞に類する情報である。
『メックリンガー少将が教えてくれたのよ。以前の捜査協力の縁でブラウンシュバイク閥からのお声が掛かっているんですって』
「よろしいのですか、私などに教えてくださって」
『貴方にも伝えてほしい、とのことよ。いずれ縁あればよしなに、と』
　メックリンガー少将は先だっての爆破事件の際に准将としてブラウンシュバイク邸警備担当であった男である。その際に被害者の一人であったラインハルトと面識を得ていた。これは彼にとって「グリューネワルト伯爵夫人の弟」であるところのミューゼル大将の庇護下に入ることで、事件での責を負わされることを避けられるであろうという打算を含めたものであったが、その実フレーゲル男爵が「犯人特定の重要情報を上げた」メックリンガーを伯父の前で絶賛したため、かえって声望が高まり、討伐軍にも少将として分艦隊の指揮権を得ることとなっていた。この情報を知らせたのは、保身に利用しようとしたことへの彼なりの贖罪であった。
　通話を終え、ラインハルトは暫し黙考していたが、やがて入室したキルヒアイスに男爵夫人との会話を告げた。今回得られた情報は、彼にとっては瞠目を禁じ得ない内容が含まれており、親友にして腹心で

ある赤毛の好青年と共有しておく必要性を感じたのである。
「キルヒアイス。あのフレーゲルめがどうしたことか、突然道義心と謙虚さを身に着けたようだぞ。いったいどのような情報の錯綜あってそのような評判が立つに至ったのか」
「満更誤報ではないやもしれません」
「ほう？　お前まであいつめを評価するか」
　顎に手を当て、ラインハルトが続きを促す。
「クロプシュトック事件の際ですが、ラインハルトさまを発見する少し前に、現場で彼と行き会いました」
「初耳だな」
「ええ。私の方も忘れていたのです……そこでフレーゲル男爵は煙の中へ進まんとする私に警告を与え、その方向には誰もいないことを知らせてくださいました」
「あいつが？」
　視線が左上に向く。ラインハルトの明晰な記憶をもってしても、あのブラウンシュバイクの甥御からおおよそ好意に分類されうる言動を受けた覚えは一切ない。いかなる変節であろう。まさか伯爵位継承が内定したから自分を「同じ門閥貴族」として扱いだしたわけでもあるまい。もしそうであるならば、いっそ滑稽なことではあるが……
「その内容は事実でありましたし、ブラウンシュバイク公の名を呼びながらではありますが、犠牲者たちひとりひとりの生存を確認しておりました」
「フレーゲルめは頭でも打ったのか……」
「あぁ、確かに頭を打って流血しておいででしたね。思い返せば、立派なお姿でした。呼び止められ睨んでしまったこと、そしてラインハルトさまだけを探していたこと、今となっては恥ずかしいことです」
　この親友は掃き溜めにも美を見出す性質であるから、やや表現が過剰となっている疑いはあるが、それでもあの場において彼がその貴顕の血にふさわしい行動をとっていたことは間違いないことのようである。驚天動地だ！
「危機にあってその真価を発揮する性質の人間がいる。もしやあの男

はそういう類の者であったのだろうか……」
「であるのかもしれません。もし今回顧問の助言を容れたのが事実であり、また果断に一門衆を処罰したことに偽りがないのであれば、この度の危機で彼は覚醒されたのでしょう」
「となれば今回参加した顧問や正規軍人からの忠誠を得られたやもしれぬ」
　優秀な人材が現れたのは歓迎すべきことであるはずだが、その出自からいえば自らの目指す覇道とは相容れぬ者であることは残念だった。しかも今回の討伐行でブラウンシュバイク公爵が元帥へと階級を進めれば、帝国軍内部にブラウンシュバイク元帥府という一大勢力が誕生することとなる。無視するには強大が過ぎる。
「退屈していたわけだし、やつめが闘い甲斐のある男へと脱皮を遂げたのであれば、望むところだ」
　それでもラインハルトにとっては、倒すべき相手が増えた、という程度のことにすぎなかった。少なくともこの時には。
　四月中旬には戦後処理を終え、官吏らに占領地を引き渡して討伐軍はオーディンへ帰還。ブラウンシュバイク公爵はフリードリヒ四世から元帥杖を授与され、ブラウンシュバイク元帥府をひらく。参謀長にフレーゲル男爵中将、提督にミッターマイヤー中将、ロイエンタール中将らを抱える大派閥の誕生であった。
　式典の後、フレーゲル参謀長がミューゼル大将と立ち話を交わしていたことを、幾人かの貴族が驚きをもち日記に書き残している。記述にいわく、フレーゲル中将はミューゼル大将にその姉グリューネワルト伯爵夫人に迫る危機を警告し、護衛を派遣することを提案し、丁寧に辞退されていたとのことであり、これを親切心によるものとするか脅迫ととるかは歴史家の間でも判断の別れるところである。
　いずれであるにせよ、五月一七日に懸念は現実となる。新無憂宮北門門外にて車列が襲撃をうけ、ヴェストパーレ男爵夫人が死亡。キルヒアイス大佐とグリューネワルト伯爵夫人が重症を負う。駆けつけたブラウンシュバイク元帥府警備兵により下手人は射殺。すぐさま明るみに出た黒幕たるベーネミュンデ侯爵夫人は翌一八日に死を

賜ったが、被害は大きいものであった。特に当事者の一人、ラインハルト・フォン・ミューゼル騎士大将にとっては。

ティアマト防衛作戦

帝国暦四八六年五月一九日　ブラウンシュバイク元帥府

「自由惑星同盟を僭称する叛徒の軍勢が、ティアマト星系の再征服とイゼルローンへの攻城戦をもくろんで居る。この侵略的意図をくじくべく、皇帝陛下は我がブラウンシュバイク元帥府へ防衛を命じられた」

重々しく伯父が語る。いったいどうしてこうなったのか。原作と乖離を見せる現状に、私はこの一か月間にわたり困惑の渦中にあった。優雅なる門閥貴族の一員としてけっして表には見せぬが、心中では疑問符がさながら初夏の台風の如く荒れ狂っている。

「ついては迎撃作戦を元帥府参謀部が立案した。フレーゲル参謀長、説明を」

伯父はこのような場では貴族の位階ではなく軍の階級で呼ぶ。そのような区別はできているわけで、「私」の記憶とこの数か月の経験からするに、大貴族でありつづけられる英明さは備えているようであった。

名前を呼ばれたことで意識をこちらに戻す。会議に参加する提督たちはミッターマイヤー中将、ロイエンタール中将、ファーレンハイト中将、エルラッハ中将、メックリンガー中将、ヴァーゲンザイル中将、ゾンバルト中将の七名。いずれも一個艦隊の指揮にたえうる司令部を抱えており、編成次第で七個艦隊が元帥府の麾下におかれることとなる。

「作戦についてご説明いたします。お手元の資料をご覧ください」

各人の端末へ送られた資料と、スクリーンに映したデータをもとに説明を始める。

「ご存じの通り、先だっての第三次ティアマト会戦で叛徒は一個艦隊を喪失、ティアマト星系の制宙権を喪失しております。叛徒にとって悲願であるイゼルローン攻略は、回廊出口のティアマトを確保しない限り補給・進軍のおぼつかない状態となっており、今回の遠征はイゼルローンへと向かうべくティアマトを再占領することが目的と考え

られます」
　ラインハルトが原作で扱き下ろしたほど「無益な出兵」ではないと思われるが、彼ほどの将才があれば、同盟に対しこのような防衛作戦に出ること自体が無益に思えるのだろうか。征服してしまえばいいのだ！　と。言葉だけならば先だってティアマトの塵と消えた同盟軍のホーランド中将と大差がないように見えるが、ラインハルトには実力が伴っていることを私は知っている。
「我が軍の戦略目標はティアマトの制宙権を維持するにあり、イゼルローンで補給の上サジタリウス腕に進出。敵の侵略企図を挫くこととなります。そのためにとりうる戦術は二つ」
　ゾンバルトがちらりと首をかしげる。帝国も同盟も、過去百年以上艦隊決戦で雌雄を決してきた。それ以外の手法など考えられぬとばかりに繰り返している。
「一つは、正攻法。ティアマトにて進撃する敵の正面に展開し決戦を強要する」
　原作とは違いラインハルトは今回の出兵に加わらない。加わったとしても、レグニツァへの出陣や敵前への突出などは行わせない。ラインハルトを殺したくないと言えば保身の本能に嘘をつくことになるが、彼を戦場にて葬るのは無理だろう。
　となると、パエッタ中将の第二艦隊が健在のまま決戦を迎えることとなる。こちらの陣容から見れば敗けるとは思えないが、相応の犠牲を払うこととなるだろう。
　ラインハルトとはできる限り敵対しないつもりではあるが、リヒテンラーデ、リッテンハイムなどの相容れぬ敵がいる以上、陛下にことあれば（つまり来年秋頃には）内戦が勃発する可能性は否めない。となれば元帥府の将兵を同盟領で流星とするわけにはいかないのだ。一兵でも多くの帰還を！
「対案は、アスターテへの進撃。敵主力を迂回しヴァンフリートを急進してアスターテへ向かう。宙域規模での後方遮断だ」
　スクリーンに迂回機動をとる我が方がプロットされる。
「卿らの意見はどうか」

伯父上が重々しく尋ねる。
「正面決戦こそ宇宙艦隊の本領。元帥府の門出にふさわしいかと」
エルラッハ中将の発言に、ヴァーゲンザイル中将とゾンバルト中将が首肯する。
「戦わずして勝つことこそ、元帥閣下の明晰なる頭脳を他の軍首脳へと誇る機会となるでしょう」
ロイエンタール中将が幾分芝居がかった物言いで反論する。ミッターマイヤー中将、ファーレンハイト中将、メックリンガー中将が頷く。予定調和である。
「うむ。わしも後者の作戦がよりこの元帥府の智謀を示すことであろうと考える。勇猛さはミュッケンベルガー元帥に任せようではないか」
とこのように作戦は決した。決していた。舞台裏を覗けば、なんということはない。アンスバッハ・シュトライト・フェルナーら参謀とともに後者の作戦計画はとうに研究済みであり、ミッターマイヤーら四提督には根回しと説明を、そして伯父上には裁可をいただいていたのである。エルラッハらの決戦派となるだろう三提督を納得させる芝居を打ったにすぎない。
「作戦詳細を」
「は。アンスバッハ少将」
丸投げである。軍事はよくわかりませんわ。
「はい。では行動計画をお伝えします。編成は……」
「ミッターマイヤー」
「ロイエンタールか。どうした？」
元帥府内には各提督の司令部と執務室が設けられている。会議を終え持ち場へ戻ろうとするミッターマイヤーに背後から声をかけたのは、ヘテロクロミアの親友であった。
周囲ではエルラッハ中将が「武功がたてられぬではないか……」とぼやき、ファーレンハイト中将は「練度もまちまちなのだ。まずは小手調べだろう」などと慰めているのかなんなのかわからない言葉をかけている。

「少しお前の執務室でいいか？」
「あぁ、構わない」
　戦場においての疾風迅雷の働きは、事務室においても健在であり、ミッターマイヤー中将の司令部は既に出征準備のあらかたの見積もりを終えていた。補給が開始されるまでは待ちの姿勢である。
　ほぼ無人の司令部オフィスを素通りし、ミッターマイヤーらは執務室で柔らかな革のソファへと沈みこんだ。
「どう思う？」
「元帥閣下か？　大貴族らしい尊大さではあるが、まぁ仕えるには我らの言も容れるし、才覚はともかく器はふさわしいお方だと思う」
「違う。我らが参謀長だ」
「うぅむ、容易に評価しかねるな……まず門閥貴族らしからぬ腰の低さとフットワークの軽さ。これは俺としては好意を持っている」
「俺からすると少々『平民的』に見えるが」
「卿は曲がりなりにもフォンの称号をいただく貴族だからな」
　言われた方は、青い方の目を皮肉げに細めた。彼の金銀妖眼から見れば、フレーゲル参謀長はテロ以降些か浮足立っているようであった。すくなくともその位階と伯父の地位にふさわしい「鈍重さ」（好意的に言えば「落ち着き」となる）は持っていない。なにせ自身が予備役であったとはいえ、同階級の平民将官へ先に敬礼したのである。
「次に、軍規への厳正さや賞罰の公平さ。これは平民である俺としては理想的であるといっていいな」
　ロイエンタールが黒の目をも細めた。一門衆を躊躇なく射殺して以降、この親友は参謀長へ忠誠心じみたものを抱いているようであった。ロイエンタールとしては権威を誇示するための行いであったようにも見えてしまうが、少なくとも平民の兵たちからは「貴族の鑑」などと評されている。ブラウンシュバイク公爵も、鼻高々であった。
「参謀たちの意見をすり合わせ一つの大計画とする能力も、申し分ない。領地での内政を行ってきた経験が生きておられるのだろう。だが、こと将才に関しては……」
　どこに、どれほどの隊を配置すればいいか。そのあたりの勘所をお

さえていない。もちろん、そこまでを求めるのは酷なことであるが、ミッターマイヤーとしては惜しいと感じざるを得ない。自らの軍才をもってそれを補うつもりではあるし、今回は作戦立案には関わっていないが、参謀たちのサポートがある。すくなくとも一見して破綻している計画ではなかった。

「そこよ。自らより才なきものの指揮に従うこと……そこだけが俺も気がかりなのだ」

「立派なお方だし、俺は彼を支えることに不満はないがな。ロイエンタール、卿はすこしばかり野心的に過ぎるんじゃないか」

「んまぁ」

ぎょろりとヘテロクロミアが頭上を仰ぐ。天井の向こうには元帥一門とその家臣がいるはずだった。

「自覚はある。そして、奇妙なことだがあの『情けない坊ちゃん』を守ることは面白く感じているよ」

「家臣団の前で口に出すなよ」

「むろん、卿と本人の前でしか言わぬさ」

そうなのである。貴族将校射殺ののち、仇討ちに燃える親族に襲撃を受けた際、フレーゲル中将は一見堂々たる姿であったが、よく見れば小刻みに震えながらハンドブラスターを構えて冷や汗をかいていた。その姿は情けなかったが、貴顕の優雅さを保とうとしている有様はやはり名門らしいものであったといえる。それを救ったのはこの場の二人であるが、以降人目のないところでは軽口を叩くことが許されていた。もっとも、参謀長本人も応じる如く下賤な物言いを用い、あれは当人にとっても息抜きとなっているのではないかとロイエンタールは疑っていたが。

「なんにせよ、俺たちも次の戦では重責を担うわけだ」

「特にミッターマイヤー、卿はな」

ミッターマイヤーの率いる隊は先頭を進み、いち早く同盟艦隊の後背をふさぐこととなる。疾風と呼ばれる名将に、それはふさわしい任務であった。

「参謀長のお手並み拝見といこうではないか」

西苑にて

帝国暦四八六年六月二〇日　新無憂宮西苑グリューネワルト伯爵夫人邸

サンルームで、ベッドの上に横たわったままで客を迎えている。大腿に傷を負い、一時は立ち上がることもできなかったアンネローゼ様がからからと笑う。お顔はまだ少し青白い。その姿を私はやや下から眺めることしかできない。医師からは、このまま治癒が進めばリハビリを開始、いずれは車椅子への移乗が可能となるだろうと言われている。しかし、それ以上は保証できないとのことだ。

ラインハルト様の覇道をお支えできないことがもどかしい。いつまでこんな状態が続くのだろうか。それとも……予備役編入、という文字が脳内にちらつく。

「おや大佐、どこか痛まれるか？」

「あらあらジーク、どうしたの？　先生をお呼びしましょうか？」

「いえ、大丈夫です。アンネローゼ様」

すると、見舞い客として訪れた中将がアンネローゼ様を伺いながら問いかける。

「あぁ、その。本当にお邪魔ではないか？」

「ええ、フレーゲル男爵、お気になさらず。私は妹ができたようで嬉しく思っております」

「ほらにいさま、言ったじゃろう。わらわが着いてくる方が断然喜ばれると」

美少女が断然じゃよ断然、と連呼していた。

「エリザベート、エリザベート。仮にも見舞いに来ている者の物言いではないよ、それは」

いーっ、と彼女は口元をゆがめる。可憐な彼女は帝位継承権第二位、エリザベート様である。その性質は彼女の父に似て些か我儘にして尊大であるが、母に似た見眼麗しさにより臣民からも人気である。キルヒアイスもこの一月交流を持つようになり、世の令嬢のうちで二番目に美しいと思っていた。一番目は言うまでもない。

「さぁ、エリザベートさま。ポテトのパンケーキをいただきましょう。お口に合うといいのだけれど」
「アンネローゼの作る甘味はどれもみな口に合う。いやぁ楽しみじゃの！　あにうえはゆるりとご同僚と話されるがよかろう」
「エリザベート」
「ふん」
　窘める従兄に鼻を鳴らし、彼女は片足を引きずるアンネローゼ様の背後を踊るようについていった。
「大佐、すまないな」
「いえ中将閣下。何度もお見舞いいただき恐縮です」
　フレーゲル男爵中将は、ラインハルト様を救った御仁である。以前は「典型的門閥貴族」としてラインハルト様の軽蔑の対象であったが、三か月前に爆弾テロで怪我を負って以降、めきめきと頭角を現している。
　先だってはアンネローゼ様に迫る危機を警告していた。かつて緩やかながら敵対していた相手であり、罠を疑って護衛は断っていたが、それでも襲撃が起きた後、元帥府から自ら警備兵を率いて駆けつけてくれた。多勢に無勢で敗れかけていたところであったため命を救った形だ。
「私が手当てをしたから、どうにも気になってしまってな。君たちにとってはしつこく感じておるやもしれぬが」
「滅相もございません」
　本来ならば軍病院に収容されるところであったが「伯爵夫人を守って負傷されたのだから、陛下もお許しになるはずだ」と男爵が主張し、宮廷内で医官から治療を受けることと相成ったのである。下半身が不随となったため、男性機能が失われており、それもこの件については有利に働いた。以来なし崩し的にここで療養生活を送っている。時折「療養中の滞在を認めた」という当の皇帝陛下がぬらりと扉の隙間から覗き込んでいることもあったが、つとめて気にしないようにしている。
「そうかね？　加えてエリザベートだ。伯爵夫人にやけに懐いてい

る。伯父上には『新無憂宮西苑の習わしを知りたいので』と言っているようだが……あれは甘えられる相手を見つけて嬉しがっているのだ」
伯父上は甘すぎるのだ全く、と腕をくんで唸っている。あのブラウンシュバイク公爵が「甘すぎる」とは斬新な意見だと思えた。
「アンネローゼさまも妹ができたようだと喜んでおいでですよ」
「それはよかった。いや、というのも今回はエリザベートのことで頼みがあるのだ」
「おや、なんでしょう？」
サンルームの外、夏の気配を漂わせ始めた庭園を見やる。彼の目はしかし、その遥か彼方、宇宙空間を見るような遠い目であった。
「ミューゼル大将から聞き及んでいるであろうが、私は辺境の防衛戦に出征する。その間、エリザベートが公爵家家臣とともに訪問するやもしれぬが、どうぞ迎えていただけないだろうか」
ラインハルト様からは聞いていなかった（どうにも、最近ラインハルト様は怪我の負い目からかお姿を見せない。残念なことである）が、コルヴィッツ氏との世間話で話題には上っていた。氏のことは当初「アンネローゼ様を拐った男」と思っていたが、なんのことはない、職務に忠実な男であり、アンネローゼ様に執事として忠誠を尽くす姿は立派なものであった。
「私は居候の身ですから判断すべき立場にはありませんが、きっとアンネローゼさまは諸手を挙げることでしょう」
なにせ、数少ない友人の一人たるヴェストパーレ男爵夫人マグダレーナ様を喪ったのだ。アンネローゼ様は時折表情に翳りが差している。エリザベート様のような陽性の気質を持つ友人を得られれば、多少なりとも気分は上向こう。今一人の友人、シャフハウゼン子爵夫人も頻繁に訪れ、エリザベート様とも良好な仲を築いている。
「感謝する。いや、彼女はああいった性格であろう？　伯父上より兄代わりを仰せ付けられた私としても手を焼いて……」
ガシャーン、と階下からモノの壊れる音がした。
「おぉ……エリザベート」

中将が頭を抱えた。

キルヒアイス大佐は北門門外事件（通称グリューネワルト伯爵夫人襲撃事件）にて下半身不随の重症を負ってからの約一年半を、新無憂宮西苑で過ごした。義手・義足の技術が発達した当時においても、頚髄損傷は如何ともし難く、彼の前線勤務は生涯にわたり絶望的と目されていた。

実際、軍務省では数度にわたり彼の予備役編入の事前審査が行われていた。それでも彼が現役軍人の座にとどまり続けていたのは、当時の複雑に絡み合った宮廷・政治事情による要請であったといえる。

この件に関与したのはエーレンベルク軍務尚書、シュタインホフ統帥本部総長、ブラウンシュバイク元帥、そして皇帝フリードリヒ四世とそうそうたる陣容であり、彼らは各々思惑は違いつつも「キルヒアイス大佐を現役に留めるべし」と幕僚総監クラーゼン元帥に求めていた。近年公開されたクラーゼン元帥の日記には、慨嘆混じりに彼らの陳情（ないしは圧力）が綴られており、当時の軍内部の政治的状況を読み取ることができる。

二人の英雄

帝国暦四八六年一〇月一二日　新無憂宮国務尚書執務室

「先だって超光速通信で報告のあった通り、叛徒どもは後方遮断を恐れティアマトから撤退。ブラウンシュバイク元帥府軍はヴァンフリート・アスターテ・ダゴン・ティアマトを長駆偵察してきた形となったそうじゃな。一兵も失わず、敵を退けたことは確かな戦略眼を裏付けておる」

執務室の主が苦々しい口調で言う。事実上の帝国宰相と見なされる国務尚書リヒテンラーデ侯爵は、軍内で勢力を拡大するブラウンシュバイク閥を不愉快に思っていた。

本来、軍を支配する帯剣貴族・帝国政府を運営する法衣貴族・地方を統治する領地貴族は互いに牽制しあい腐敗を避けるために独立していた。しかしながら度重なる軍の敗北により帯剣貴族が発言権とその実数を低下させ、ついに第二次ティアマト会戦「軍務省にとって涙すべき四〇分間」で残ったほとんどもヴァルハラへ旅立ってしまった。いまや、帯剣貴族で軍高官の席に座るのは宇宙艦隊司令長官ミュッケンベルガー元帥と幕僚総監クラーゼン元帥程度であり、軍務尚書エーレンベルク元帥は門閥貴族の、統帥本部総長シュタインホフ元帥は政府系の息がかかった存在である。

そこにきて、ブラウンシュバイク元帥の誕生とその功績である。リヒテンラーデとしては、シュタインホフと軍内勢力図の行く末について協議する必要が生じてしまった。いまだ後継を指名せぬままで皇帝の健康不安が浮上した以上、直接干戈を交えぬにしても五年以内の後継者争いは必至。軍事力は発言権の背景となる。

「統帥本部総長、忌憚なき意見を聞きたい。軍の政治的現状は貴官の目から見てどのようなものか」

「国務尚書閣下。軍内部は単純に派閥では割り切れぬ戦友同士の信頼関係などもあり、一概に断言することは難しいですが……現在のところ法衣貴族の勢力は弱体と判断せざるを得ません」

「軍務省官僚は法衣貴族が多数派を占めているではないか」

「実戦派の将校はほぼ領地貴族系と帯剣貴族系が独占。両者は戦場で友好関係を築いております。翻って我々官僚団は後方にあります。結束の面で劣ると言えましょう」
「ふむ」
　いかな万事に知悉すると評判高い国務尚書であろうとも、こと軍事には疎いと言わざるをえなかった。シュタインホフがそう言うのであれば、そうなのであろうと判断するしかない。
「一朝ことあり、やつばらめが蜂起することあれば」
「はっはっは、面白いことをおっしゃりますな」
　思わず顔をしかめる。なにも笑い話をしているわけではない。ブラウンシュバイク公爵とその甥が軍内で支持を拡大しているのは明白な事実。皇帝陛下が崩御し跡目争いが始まれば旗艦「ベルリン」の砲口が政庁へ向けられること、十分ありうることではないか。
「あぁ失礼。いや、そのようなことがあれば、小官はエリザベート姫殿下の下へはせ参じ、慈悲を請うしかないでしょうな」
「それほど状況が悪いと申すか……」
　色を失い、悲嘆混じりに言葉を吐き出す。
「軍務省勤務の軍人の大半は、事務官です。閣下も事務官がいくらいたところで、装甲擲弾兵と戦えるとは思いませんでしょう」
　幸い装甲擲弾兵総監オフレッサー上級大将は特定派閥に属さず、強いていうなれば「政治を軍に持ち込ませぬ」を信条に掲げる帯剣貴族らに近しい人物である。理由なく門閥に下ることもなかろうが、かといって「なまっちろい」軍官僚たちと共に行動するとは思えない男であった。
「なるほど、状況は分かった。何か打開策はあろうか」
「ふむ、ミューゼル大将を法衣貴族に取り込むことはできませなんだか。彼の姉の執事はコルヴィッツ騎士爵でしょう。帯剣貴族とも領地貴族とも距離を置いております。療養中の副官も平民出身で、御しやすいでしょう」
　そう思えばこそ、幕僚総監ごときに借りを作ったのである。
「やつめをブラウンシュバイク元帥の対抗馬へとして育てようという

のだな」
「ええ。幸い戦闘に突入しませんでしたため、軍費にはいささかの余裕がございます」
　その余裕を作ったのがブラウンシュバイク元帥府であることは、いささか皮肉なことであったが。
「では、年明け頃ローエングラム伯爵家継承と同時に出兵させ、戦果をあげさせよう。どこぞ、手頃な出兵先はあるか」
「アスターテなどはどうでしょう。先だってブラウンシュバイク元帥府が詳細な測量を行っておりますゆえ」
　こうなってくるともはや喜劇であり、ブラウンシュバイク元帥府はミューゼル大将に立身出世の機会を与えるべく出征を行ったかのごとき様相を呈している。
「ふむ、よいじゃろう」
　ともかく、なんとかミューゼルを今まで以上に立身出世させ、ブラウンシュバイクの対抗馬とせねばなるまい。もとより門閥を憎む孺子のことである。さすれば自然と敵対関係を育むであろう。この時、神ならざる国務尚書は、金髪の若者が法衣貴族も憎しみの対象としていることを完全に失念していた。
　帝国歴四八七年二月、自由惑星同盟支配領域のアスターテ星系へ、銀河帝国軍ローエングラム伯爵大将率いる二万五千の艦艇がジャンプアウトした。その参謀長はあらゆる戦術に通じると名高いシュターデン中将。指揮下には猛将ビッテンフェルトを筆頭にケンプ、ワーレン、ルッツと帝国軍の少壮気鋭と名高い司令官が配されており、帝国のアスターテ制宙権確保にかける本気をうかがわせるものであった。
　対する自由惑星同盟も、この地を押さえられてはいよいよ要塞どころではなくなると、議会の決裁を得て三個艦隊を防衛に出撃させる。ムーア提督の第六艦隊、パストーレ提督の第四艦隊、そしてパエッタ提督の第二艦隊であった。パエッタ中将の幕僚には、後に銀河に歴史家提督として名を馳せるヤン・ウェンリー准将と、その参謀長となるジャン・ロベール・ラップ少佐がいた。

ローエングラム艦隊は、包囲殲滅の危機に陥りつつあった。三方から同盟艦隊が迫るなか、ローエングラム大将は正面に展開する第四艦隊へ突撃、パストーレ中将は懸命に応戦し、艦列へ突入したビッテンフェルト分艦隊に艦載機隊を発艦させ打撃を与えるも、旗艦レオニダスへの被弾により気密が破れた外壁から吸い出され戦死。指揮系統の乱れにより第四艦隊も壊滅の憂き目にあう。

掃討戦もそこそこに、すぐさま進路を変更し第六艦隊後方への襲撃を試みたローエングラム艦隊であったが、その背後に第二艦隊が食らいつく。親友パストーレを喪い復讐に燃えるパエッタ中将の猛攻であった。

当初第四艦隊への合流を企図したパエッタ中将であったが、幕僚たるヤン准将に理から、ラップ少佐に情から説得を受けた参謀長アーメド少将が「二倍近い敵の奇襲を受けた第四艦隊は絶望的である」ことを訴え、涙を飲んで仇討ちのため第六艦隊との合流を目指していた。一歩及ばずローエングラム艦隊による奇襲は許したが、ローエングラム艦隊は包囲された形になり、かえって有利に働いていたと言える。

ローエングラム大将は引き際を悟り、第六艦隊の右翼を掠める形で突進。第二艦隊は味方との衝突を恐れ減速し、追撃を断念。第四及びに第六艦隊の生存者救出へと移った。

この戦いはいずれが勝者であるか判然としないものである。帝国は分艦隊規模の戦力喪失と引き換えに正規艦隊を消滅させ、しかしながら戦略目標を果たせなかった。同盟はアスターテの制圧を辛うじて避けたが、一個艦隊とその人員を喪失した。

それゆえにこそ、両者は勝利を喧伝し、それにふさわしい英雄を必要とした。帝国において白羽の矢を立てられたのは、ラインハルト・フォン・ローエングラム伯爵。彼は大将から上級大将へ昇進の上「アスターテの英雄」として皇帝陛下より直々に勲章を賜った。

一方、同盟では複数人の英雄がメディアにより神輿の上へと乗せられた。パエッタファミリーと呼ばれる集団――第二艦隊司令部幕僚――である。ジャン・ロベール・ラップ中佐は結婚式に記者一個小隊の突撃を受け、アーメド・サンジャル中将が乱闘を演じる騒ぎとなっ

た。エルファシル以来となる注目を浴びたヤン・ウェンリー少将は援護と称し記者たちへ放水銃を放ち（命中はしなかった）遅れて到着したフォード・パエッタ大将はその物々しさで以て乱痴気騒ぎを収束せしめたが、彼らに注がれる好奇の目はより一層増すばかりであった。

アーメド中将は第二艦隊司令官に昇格し、ヤン少将はその参謀長となった。ラップ中佐は作戦参謀としてその補佐に当たる。グリーンヒル大将は統合作戦本部次長兼宇宙艦隊総参謀長の二つの重責のうち後者をパエッタ大将へ明け渡した。パエッタ大将はマスコミからこう呼ばれる。「アスターテの英雄」と。

近衛司令部反乱時鎮圧計画

帝国暦四八七年四月一二日　ブラウンシュバイク元帥府

「この計画は……卿らは近くこれが必要となると見ているのか」

「は。確かな筋より得た情報をもとに確信しております」

確かな筋、とは「原作知識」であるとは言わない。気が触れたと思われるだけである。第一にしてすでに世界は大きく解離している。双璧の不在でキルヒアイスが脱落し、パエッタ提督が英雄に……雪だるま式に拡大する誤差により、参考にできることは限られてしまっているのだ。

それでも、例えばカストロプ公爵の死と嫡男の反乱は変わらなかった。シュムーデ提督らの敗北はミッターマイヤーを鎮圧に出撃させたことで存在しなくなり、マクシミリアンはその軍才を発揮するまでもなく星系を漂うデブリとなったが。

即ち自然死事故死などは時期が変わらないということである。であるならば、今上陛下は一〇月中旬に、死者の館へと居館を移すこととなろう。

「しかし、これは……」

伯父上、ブラウンシュバイク公爵元帥が揺らす書類は「近衛司令部反乱時鎮圧計画書」である。虚飾を廃した言い方を用いるならば、新無憂宮ならびに中央官庁街の制圧計画書であり、更に直截な表現を用いた場合は「クーデター計画書」であった。

無論、軍務省も国務省制圧計画をオプションとしては用意しており、内務省も軍務省に対する社会秩序維持局による要人暗殺作戦を用意している。どころか、治安・武力組織のうち帝都に本拠をおくものはお互いに対するすべての制圧計画を用意しており、タフネゴシエーションではその存在がほのめかされることもあった。

そういったわけで、この書類も元帥府発足から研究されてきた計画書であるが、これに基づく動員準備を行うとなれば話は別である。警戒を受けるのはもとより、なにより資金がバカにならぬ。

だがこれは必要なのだ。リヒテンラーデ・リッテンハイム両侯爵と

ラインハルトへの対策として。そういったわけで、立案者のシュトライト少将、フェルナー大佐らと共に元帥執務室で直訴しているのである。
「間違いがあっては取り返しがつかぬぞ」
「覚悟の上です。しかし義弟たるリッテンハイム殿ならばいざ知らず、リヒテンラーデが全権を掌握することあれば、一門のみならず、エリザベート様までが死を賜ることとなるでしょう」
　それを避けるためには先手を打つしかないことを匂わせる。説明はできないが、実際そうなったわけだ。
「リッテンハイムとなら手も結べよう」
「やつらと同じ旗は仰げますまい。ともに擁立せんとしているのは女系です」
　ブラウンシュバイク王朝が立つか、リッテンハイム王朝が立つか。原作では両者が牽制しあううちにゴールデンバウムが延命し、そしてローエングラム王朝が銀河を統べるに至った。そうはさせない。むろんローエングラム朝は臣民には公平で公正な支配者であろうが、その宇宙にブラウンシュバイク家やフレーゲル家の居場所はないのである。帝国の権力の空白期を作らぬには、皇帝の死後直ちに全権を掌握する必要があった。リヒテンラーデに主導権をとらせるな、という話である。
「で、あろうな……このような決断を迫られるとは」
　視線が左上を見る。思い出しているのはアマーリエ様との結婚か、フリードリヒの即位か。はたまた祖先が爵位を得るに至った故事か。
「公、黙認という形も可能です。さすれば万が一の場合、若様も無関係として、我ら臣のみが責めを負いましょう」
　アンスバッハが言うと、伯父上は目を閉じ深呼吸をする。そしてゆっくり口を開いた。
「……ブラウンシュバイク一門の当主たるわしが、無能の謗りは甘んじようとも怯懦の烙印を捺されるわけにはいかぬ。ゆえに」
　やはりだめか、と思う。ならばいっそエリザベートをつれ、開拓移民船にでも逃げ込むかとやや捨て鉢ぎみに考えを巡らせ始めたとこ

ろで。
「わしの責任でことを起こす」
なんと。
「再びこのような博打に興じることとなろうとはな……！」
伯父上の目に、炎が見えた。
驚きつつ思い起こせば、彼は先の継承権争いでリヒャルト皇太子とクレメンツ皇子のどちらにもつかず、勘当された放蕩息子たるフリードリヒ四世へと忠誠を誓ったのである。ここ一番での大博打にはむしろ一日の長があるといってよい。いやはやなんとも。
「ヨアヒム、わしは娘に……いや、エリザベート姫殿下に銀河帝国を献上するぞ！」
フリードリヒ四世の平穏な治世の間は惰眠を貪っていた、眠れる獅子が目覚めようとしていた。
「フェルナー大佐、こちらが紹介したいという人物か」
「は。パウル・フォン・オーベルシュタイン大佐であります。お目通りがかないましたこと、光栄に存じます」
ぎらり、と両の義眼が光る。彼の両眼は先天的に光を映さず、生まれてより義眼生活を余儀なくされている。おそらくは、人物を推し量るためにわざと光らせているのだろう。
「オーベルシュタイン大佐、義眼の調子が悪いようだね。私も神経系の工学者に知人がいてな、よければ紹介しようかね？」
「……さすが大将。よくお気づきで」
機先を制されたオーベルシュタインが眉をつり上げる。その表情の意味するところが「驚き」か「警戒」かは判然としない。
「生来の疾患です。ルドルフ大帝の御代であれば『劣悪遺伝子排除法』で処分対象だったでしょう」
「なるほど、あれは悪法であるからな。次代の陛下は廃法とする労を厭わぬであろう」
「参謀長閣下」
「よいのだフェルナー。彼はわかって来ている」
「……」

「……」
　ルドルフ大帝への批判と、次代の陛下への言及。意味するところをわかったか、黙するオーベルシュタインをじっと見る。彼はやや困惑しているようにも見えた。
「そのためにこそ、この元帥府に参ったのであろう」
「は。やはりブラウンシュバイク家はお立ちになりますか」
「その必要があればな。密告するかね？　さすればリヒテンラーデは卿を買うであろう」
「ご冗談を。朽ちた樹は取り除く必要がありましょう」
　オーベルシュタインのまとう雰囲気が変わる。覚悟を決めたと見るべきだろう。彼の目標は黄金樹の伐採であり、どうやら我々ブラウンシュバイク一門は樵としての実力を彼に見込まれたようだ。ことが大逆に属するゆえ一蓮托生となるが、彼は簒奪の意思と行動をこちらが示す限り、裏切りはしないだろう。
「うむ。卿はミュッケンベルガー元帥の幕僚であったな？」
「は。イゼルローン要塞駐留艦隊司令部幕僚として転出を任ぜられております」
「近く元帥府への転属を命じられるよう、手配することを約束しよう。フェルナー大佐の同輩として切磋琢磨してくれ」
「ありがとうございます」
「それと……近く叛徒の攻勢があるだろう。要塞の弱点は、私が思うに要塞・艦隊両司令官の不和である」
「参謀長閣下は軍務省に編成の変更を注進したのだ。政治力学の観点から容れられれんかったがな」
　フェルナーが補足する。電子の視線を向けられ、肩を竦めた。帝国の歪みの発露のひとつである。このような醜態でなお国土を喪失していないのは、ひとえにイゼルローン要塞のハードウェアとしての優越性によるところであろう。原作通りならヤンの第一三艦隊の餌食となるが、第二艦隊は健在、その司令官はアーメド中将である。しかしその部下にはヤンとラップがおり、原作よりも危険にすら思える。
「ともかく、ゼークト大将には軽挙妄動を慎んでいただくように。

コップが割れるようなことがあれば」
「中身をかき混ぜることもできませぬからな」
義眼が光った。
五月一九日、アーメド中将率いる自由惑星同盟宇宙軍第二艦隊は詭計を案じイゼルローン要塞に陸戦隊を突入させることに成功した。それは艦隊陸戦隊内の貴族出身亡命者を活用したもので、艦隊に追われた巡洋艦を装ったものであった。要塞駐留艦隊が迎撃に出陣するのと入れ替わりに怪我を負い要塞に逃げ込んだ艦長（の役回りを演じた陸戦隊員）は特命を盾に要塞司令官との面会を要求し、司令部へと搬送される。しかし、出撃反対を唱え艦隊司令部から連絡将校として要塞に残された（厄介払いに押し付けられた、と要塞側は考えていた）オーベルシュタイン大佐が形式に則った身分照会を主張。結果として司令部への彼らの突入は避けられる。
要塞奪取こそ果たせなかったものの、司令室近傍での戦闘が発生し、その余波で要塞主砲トールハンマーの発射管制が一時不可能となったことは同盟に有利に働いた。要塞砲射程へと後退し、一息ついた帝国軍はそのまま突進した第二艦隊に食い破られ壊滅の憂き目に会う。ゼークト大将もこの際に旗艦と運命を共にした。いよいよ入城かと意気込んだ同盟軍であったが、作戦要綱にあった要塞との通信が確立できず、第二艦隊は要塞奪取失敗を悟り撤退する。司令部は戦略的には無意味な戦いとなったと歯噛みした。
されど第七次イゼルローン攻防戦は、結果として同盟第二艦隊は陸戦隊内の決死隊を喪うのみで、要塞駐留艦隊を壊滅、要塞砲を一時使用不可能とした。これは長きにわたる同盟の攻城戦への研究が結実したものであり、もはや要塞の不落神話は過去のものとなったとみられた。アーメド中将は英雄としての名声を不動のものとし、年内の大将昇進が確実視された。近くロボス・シトレ両元帥が勇退、その後任にパエッタ大将とグリーンヒル大将が充てられることは周知の事実であり、その際には宇宙艦隊総参謀長の座につくであろうとの噂が多数派を占め、それは国防委員会の方針と矛盾するものではなかった。計画立案者ヤン参謀長は、再建中の第六艦隊司令官へと転出が内定。

艦艇が定数を満たすまで暫定的に少将階級に留まり国防委員・戦史編纂室顧問となった。

第八次イゼルローン攻防戦

宇宙歴七九六年九月一二日　統合作戦本部ビル

「であるからして、道義的優位性に勝る我々は、今回こそイゼルローンを落城せしめることが敵うでしょう！」

作戦参謀アンドリュー・フォーク准将が朗々たる演説を締めくくった。これが政見放送であれば拍手喝采であったであろうが、現実の作戦を論議すべき場にはふさわしからざるものであり、会議室は戸惑い半分しらけ半分といったところであった。

「要塞奪取を目指す都合八度目の攻城戦であるということは十全に理解した」

口火を切ったのは、第五艦隊司令官アレクサンドル・ビュコック中将である。今回の作戦に動員される第三艦隊・第五艦隊・第七艦隊の三個艦隊の司令官のうち、最年長のたたき上げであった。それゆえに「老練」の代名詞と呼ばれ、階級以上の影響力を誇っている。

「しかしながら、何故このタイミングなのだ」

老将が聞いているのは「どうしてもっと急がなかったのか」である。先の第七次攻防戦により要塞駐留艦隊は戦闘力を喪失。一時イゼルローン方面に帝国側機動戦力は不在であったのだ。その隙を狙えばよかったものを、という主張であるからこれは諸将も疑念を抱くところであった。

「お答えいたしましょう。ご存じの通り、要塞防御司令にはコルネリアス・ルッツ大将が就任。要塞駐留機動戦力はカール・グスタフ・ケンプ大将の艦隊が補充され、要塞・艦隊双方を統べるイゼルローン方面軍司令官の職が新設。ラインハルト・フォン・ローエングラム伯爵上級大将が親任されております」

帝国通からみれば「帝国軍ローエングラム派が要塞に派遣され防御態勢を固めた」とわかる陣容である。昨今力を増す帝国軍ブラウンシュバイク派、現在も発言権と名将を抱えるミュッケンベルガー派が軍内で競い合っている（と帝国事情は伝えられている）ことを考えれば、帝国の将官の人材の厚さは同盟軍の羨むところであった。

「ローエングラム上級大将は若干二〇歳、皇帝の愛姫の弟であるために立身出世を重ねた、いわば専制主義の寵児です。彼の一派が掌握したイゼルローンは、むしろ弱体化したといえましょう」
自信満々にフォーク准将は述べる。この場には直接対峙した経験を持つパエッタ大将もいたが、彼もまた「ローエングラム艦隊の活躍は智将シュターデンの手による芸術的作戦が背景にある」と信じ込んでいた。ローエングラム上級大将本人を評価しているのは、同盟では現在までのところヤン中将程度であったが、彼は本人たっての希望により暫時戦史編纂室顧問の任にあり、実戦部隊を離れて歴史記録に囲まれる状況を思う存分に満喫していた。
フォーク准将の言に納得する態度を示したのは、第三艦隊司令官ルフェーブル中将と、第七艦隊司令官ホーウッド中将であった。いずれも士官学校を卒業してより数多の戦いで勝利を重ね、輝ける武功を胸の勲章にぶら下げる、同盟の名将たちである。
「瓢箪から駒が出る、ということもあるぞ」
ひとしきり鼻をならしたあと、ビュコック中将は警句を口にした。まさしく、オリオン腕においてはラインハルトの評価はその通りであり、野心を疑うものや派閥を疑うものはいても、将才を疑う人間は皆無といってよかった。今回のイゼルローン方面軍司令官という新ポストも、リヒテンラーデ国務尚書・シュタインホフ統帥本部総長により計画された「功績を立てさせる」ための配置である。
「閣下のような人物は、そうそう居るものでもありますまい」
ルフェーブル中将にそう言われては引き下がらずをえない。こちら側の渦状腕では、士官学校を経ず一兵士から提督へ上り詰めたビュコックこそが「瓢箪から駒」と目されているのである。
「では、行動計画をお話しします。データパッドをご覧下さい」
フォーク准将の声は、よく通る声であった。
「ヤン顧問殿、此度の帝国の動きはどう考えられておいでで？」
「よしてくれラップ室長」
本来戦史編纂室長には大佐を以て充てる。ヤンは武功によりポストを選ぶ権利が与えられた時、近々中将にならんとする少将には相応

しくないその地位を望んだ。そのポストが得られるならば、降格も厭わない（年金は惜しかったが）という態度が功を奏したか、またいかなる解釈と軍律の曲解を経たのかは定かでないにしろ、期限付きで顧問という珍妙な肩書きを得て、編纂室の扉を潜れたことは、彼にとって望外の喜びであった。

ラップ大佐は共に戦史編纂室への異動を希望、この二人は第六艦隊司令部への転任が内定しており、ならば一緒に分かりやすい場所へ放り込んでおけ、という理屈か彼が室長の座に座らせていた。

「常識的に考えれば、今回我々の付け入る隙となった指揮系統について一本化を図ったということだろうね」

「非常識な考えもあると」

「うん。些か突飛な思考になるが、官打ちとか……」

「官打ち？」

はて。如何なる戦法戦術の類であったか、とラップは思う。彼も戦史研究科在籍の歴のある人物であり、戦史に限ってはヤンに勝るとも劣らない事跡に通じていた。しかし、興味の赴くままに文化史・政治史までを読み漁ったヤンと比べ知識の幅は狭いものであったから、その言葉の意味は分からなかった。

「西暦古代史に属する政治用語だから、知らなくても無理はないさ」

「悪い癖が出ているのではないですか？　顧問殿」

「よしてくれってば、ラップ。ええっと……」

ばりばり、とおさまりの悪い黒髪を掻く。これが智将と呼ばれる人間であるわけで、ラップとしては「英雄は遠くにありて想うもの」だと思わざるを得ない。

「東洋の島国、日本――カタナやサムライの起源となった国だよ――の宮廷政治家の使った政治戦術の一つだね」

カタナやサムライ、そしてニンジャは現在に至るも同盟のコンテンツで人気のテーマだ。中でも光を発するライトカタナを使う銀河連邦のサムライ集団「ジダイ」を描く「ジダイバース」と呼ばれる作品群は士官学校でも愛読者が多かった。

「ニンジャを使った暗殺か何かか」

「いや。非常に穏当なものさ。憎むべき敵を賞賛し、高い官位を与えるんだ」
「なんだそりゃ。敵に塩を送る、ってやつか？」
「それも日本の表現がもとで――」
「後で聞く。本筋を頼む」
　やや不満げな顔をしてヤンが紅茶を飲む。
「不相応な官位職責で、相手が自滅するのを望んだのさ。放っておけば勝手に転ぶ、ってことだね」
「……ははあ。なるほど、失敗を望んであえて前線の責任者にしたって？」
「うん。専制主義国家の帝国で、しかも憎まれっ子たる天子の寵姫の弟だ。同盟に手を下させれば、皇帝の憎悪は隣の渦状腕に向かうと考えたら悪い話じゃないだろ」
「俺は時々お前が恐ろしくなる」
「でも今回はきっと違うと思うんだよね。彼を出世させたい思惑と、帝都から遠ざけたい思惑とが絡み合って、結果としてやや過分にも思える出世が……」
　そのまま黙考に入ったヤンを放置して、ラップ大佐はコーヒーを汲みに給湯室へ向かう。軍のコーヒーは安物らしい味だが、彼はその味を気に入っていた。
　ヤン少将の「銀河帝国における政治事情の考察」と題されたレポートが提出されたのは、これから数週間後のことであった。その時点で既に攻撃部隊とロボス元帥の座上する総旗艦アイアースはアスターテを抜け、イゼルローン宙域へジャンプアウトしていた。
　結果から言えば、帝国暦四八七年（宇宙歴七九六年）一〇月上旬に戦われた第八次イゼルローン攻防戦は以前までのそれと同様、同盟の遠征軍がイゼルローンを敗軍として後にする形で終結した。被害は当然第七次のそれより大きいものだったが、長らく蓄積した攻城戦の経験から「惨敗」のレッテルを貼るには小さいものであり、またケンプ提督の要塞駐留艦隊も、正面からの打ち合いで相応の損失を負ったのであった。

こうあっては容易にラインハルトを昇進させることはできない。帝国の人事は、機動戦を得意とするラインハルトの才能をイゼルローンへしばりつけることによって、図らずして「官打ち」の体をなしていたのであった。追撃で戦功を上げることを目論見、ティアマトからアルレスハイムへ抜けて撤退中の艦隊を襲撃する計画を立てたラインハルトであるが、思わぬ事態により掣肘を受けることとなる。

一〇月一〇日、銀河帝国皇帝フリードリヒ四世が崩御、帝国臨時政府は全戦線での攻勢の停止を指示したのであった。

一〇月一〇日事件

帝国暦四八七年一〇月一〇日　帝都オーディン中枢地区

その日、帝都にはやや早い冬が訪れていた。前日から極地で発達した高気圧は帝都周辺での低気圧を招き、寒風と雪雲は冬将軍の指揮のもと新無憂宮へと突撃を敢行していた。雪はしんしんと帝都に降り注ぎ、黒と灰色に彩られた都市は白く染められていた。

最初に事態に気づいたのは未明に参内した国務尚書クラウス・フォン・リヒテンラーデ侯爵であった。勝手知ったる内裏であり、また国務の機密を扱うわけであるから護衛や警護もつかず、平素の如く参内し本日皇帝に仰ぐべき事柄を確認しようとした（とはいってもその大半は「よきにはからえ」と丸投げされるのであるが）老人は、薔薇の中に倒れた皇帝を見て「陛下！」と鋭く叫びながら駆け寄り、まずその顔を興奮で赤く、続いて衝撃で青くした。

死んでいる！

医学に造詣が深くないリヒテンラーデにも、白く冷えたフリードリヒ四世の躰はその活動を停止していることがわかった。急ぎ宮廷医オレンブルク医学博士を呼び、死亡を確認してもらわねばならない。その後全土へと崩御を伝え、国葬を経て服喪の期間を……と、そこまで考えて、次期皇帝の擁立へと考えが及ばざるをえなかった。候補となる皇孫は三人。亡き皇太子とメイドの間に生まれたエルウィン・ヨーゼフ、枢密院議長ブラウンシュバイク公爵元帥の娘エリザベート、皇帝顧問官リッテンハイム侯爵予備役大将の娘サビーネ。

ローエングラム伯爵を元帥に上らせ、自派閥で囲っていたエルウィン・ヨーゼフを至尊の座へ戴くことが、当初リヒテンラーデ閥の思惑であった。しかし、皇帝の死が早すぎたのである。あと半年あれば、ローエングラム元帥府とブラウンシュバイク元帥府を噛み合わせることができたものを！　動員計画をちらつかせるブラウンシュバイク公爵がこちらを排除しようとしていることは自明であり、パートナーには相応しからざることは疑いがない。

リッテンハイム侯爵との協力……それしか選択肢はないだろう。

彼も自領に多くの私兵を抱え、仮にも帝国軍予備役大将の身である。ブラウンシュバイク元帥府には敵わずとも、彼とシュタインホフら軍官僚をおさえれば、ローエングラムの孺子が方面軍を引きつれて帝都へ帰還するまでの時間を稼ぐことはできるだろう。女帝サビーネにはのちに従弟エルウィン・ヨーゼフと婚姻を結ばせ、帝国を盤石とする。

そのためには、時間が必要だ。

皇帝の死体を再び見下ろす。長らく仕えたお方である。ここにこうしておくには忍びないが……椅子にかかっていた豪華な刺繍の毛布を、皇帝にかける。暫し皇帝崩御の報は遅らせ、リッテンハイムと協力体制を速やかに締結、そののちローエングラムに命を送る。

そこまでは、御辛抱下され。彼は脳内で皇帝へ呼びかけた。

リッテンハイム侯爵オーディン邸の主の部屋に、深夜に光が灯った。それを伝える電波が、この一週間不夜城と化しているブラウンシュバイク元帥府に飛ぶ。

大路で黒の軍服が列をなす。彼らは純白の雪景色を踏み荒らしながら、国務省ビルディングへと向かっていた。警備兵から誰何の声が飛んだが、両眼の義眼を光らせた大佐から「国務省に爆発物が仕掛けられたとの情報があった。ブラウンシュバイク元帥府が政府の要請により立入調査を行う」と告げられ、危険を理由に遠ざけられてしまう。ブラウンシュバイク元帥府といえば爆破テロ対策に力をいれており（その成り立ちからして納得できることだ）装甲車からは爆発物対策装備の擲弾兵たちが飛び出しており、どうやら事実であるようだと判断した警備兵たちは用意された兵員輸送バスに無防備にも乗り込み、提供されたホットコーヒーを飲んで暖をとっていた。早朝に出勤した（或いは残業していた）熱心な官僚たちも、優雅とはいえないまでも体の温まるティータイムに興じることとなった。

宇宙港では鳶色の髪の大佐が、道路と鉄道を封鎖した。その名目は「荒天につき、皇帝特命を受けたブラウンシュバイク元帥府艦艇の連絡シャトルの発着を優先させるため」であり、実際にブラウンシュバイク私兵艦隊がヴァルハラ星系に大量にジャンプアウトする姿を

レーダーで確認した職員たちは、疑念を抱くことなくその命に従った。帝国においてはありふれた「トラブル」であり、文句を言う旅行者などは存在しなかった。

その他の官衙や貴族邸宅でも、ブラウンシュバイク元帥府所属の隊が突然現れ、封鎖・制圧・隔離などを遂行した。軍や政府の高官たちも、テロ対策としての保護を名目に武装した元帥府兵が周囲を固めた。元帥にして公爵、皇帝の娘婿――そして偉大なる英雄。ブラウンシュバイク元帥とその兵を疑うものはおらず、或いは疑っても銃を向ける勇気のあるものはおらず、なんら抵抗を受けることはなかったのである。遠巻きに包囲するに留められたのはリヒテンラーデ侯爵邸、リッテンハイム侯爵邸、装甲擲弾兵司令部、そしてオフレッサー上級大将邸のみであった。

記録によると、新無憂宮の大門をブラウンシュバイク元帥、フレーゲル大将らが通過したのは午前六時四五分のことであった。オットー・フォン・ブラウンシュバイクに「皇帝陛下に急ぎ奏上すべきことあり」と言われ、その面会を断れる近衛兵はいなかった。司令官モルト中将からして、階級も位階も、そして皇帝の信も自分より上であるブラウンシュバイクに接するには十全な配慮を要したのであるから、貴族将校が中心の近衛などは言うに及ばずであろう。

彼らは譜代家臣と帯剣した将官二名（のちに、ミッターマイヤー大将とロイエンタール中将であると明らかになる。フレーゲル大将が「オフレッサーを除けばオリオン腕最強の戦士たち」だと主張し同行が命じられた）で周囲を固め、新無憂宮内部を内裏に向かい突進のごときスピードで歩いていたとされる。いよいよ皇帝の居館の扉に手をかけんとしたブラウンシュバイクに待ったをかけたのは、やせぎすの老人、リヒテンラーデ侯爵であった。

「公爵、御用とあれば私がうかがおう。陛下は未だお休みであられる」

「ふむ……陛下をお休みにならせた、というわけだな？」

リヒテンラーデは眉をひそめる。それでもたじろがないのは、帝国政府に長きにわたり君臨したこの老人の胆力によるものであった。

「ならせた……？　なにか勘違いがあるようじゃが、陛下はお眠りな

のだ。起きられれば謁見を行うよう手配する故、まずは一旦……」
「ヨアヒム」
「は。伯父上。間違いないかと」
数拍にも満たぬほど、ブラウンシュバイクは瞑目した。そして眼を見開く。
「ど、どうされた公爵」
今度ばかりは、さしものリヒテンラーデも怯みを見せた。
「リヒテンラーデ侯爵、陛下へ奏上すべきこととは他でもない」
けげんな表情をする。ここにはブラウンシュバイク一派のほか、事実を知らず追ってきた近衛もいる。叩き起こされ、やや髪の乱れた近衛司令官モルト中将も問答の間にようやっと到着していた。
カツン、と元帥杖が石畳を叩いた。そしてうなりを上げ、リヒテンラーデ侯爵の眼前に突きつけられる。
「卿へ畏れ多くも陛下弑逆の疑いがかけられている。わしは皇帝陛下より先だってその捜査を命じられ、ここへ報告すべく参内しておるのだ」
「そ、そのようなこと」
「そう。あり得ぬことだ。卿は陛下第一の忠臣。そうであるからこそ、秘密裏にわしが調査を命じられた……ヨアヒム」
「は」
フレーゲル男爵大将が一枚の紙を筒から取り出す。その内容は確かに公爵の言と矛盾しないものであり、アルコール依存により震える手で記されたと思しき皇帝のサインと――
「玉璽が」
その真正を示していた。自分たちが素通りさせていた国務尚書がそのような疑いをかけられていたと知り、青ざめた近衛兵たちがサーベルへと手をかける。ミッターマイヤー、ロイエンタール両将は、さりげなく体をフレーゲル男爵の前へと差し込んだ。
「では、陛下へご報告させていただく。御免！」
「ま、待て！」
裏返った声で侯爵が言う。近衛兵の目が剣呑なものへと変わった。

「なにかな侯爵」
「陛下は、陛下は先ほど息を引き取られた。わしはそれを知らせるつもりで……」
「おや――近衛諸君、閣下は何時参内されたのかな？」
「三時間前であります。元帥」
もはや逡巡は不要、とばかりに近衛達が滑らかに動き、侯爵を後ろ手にとらえる。サーベルを抜こうとする兵を、フレーゲル大将が制した。
「謀議に加わったものを見極めねばならぬ。尋問は元帥府で行いたいが、よいか」
「は……陛下の思し召しとあれば」
侯爵は歯を食いしばり……そして項垂れた。数十年政府を支配した妖怪は、あっけなくその命脈を絶たれる。現場に居合わせた近衛兵ノイマン中尉の証言によればフレーゲル男爵はその時小声で「面妖なと思いビームを一閃すると、ぎゃっと声が響き古狸が倒れていた」と呟いていたとされるが、その言葉の意味は定かではない。
一〇月一〇日事件、通称「新無憂宮の変」と呼ばれる事件は皇帝暗殺事件である。フリードリヒ四世帝は健康を崩し病臥していたが、その皇帝を側近中の側近と目された国務尚書リヒテンラーデ侯爵が弑した。犯行動機は皇位継承をめぐるものであったとされる。
同年年始ごろ、皇帝は病床へ娘婿オットー・フォン・ブラウンシュバイク公爵を招いた。帝位継承権二位となるエリザベート姫を皇太孫とすることを伝えたのだという。リヒテンラーデ侯爵とリッテンハイム侯爵にもこれを伝えたため、手を携えて帝国を守るように、とのことであったと公爵は語る。
しかしそれは裏切られた。リヒテンラーデとリッテンハイムは帝国の全権を掌握すべく、勤王家のローエングラム上級大将をイゼルローンに遠ざけ、シュタインホフ統帥本部総長と共謀して皇帝を立太孫前に排除することを計画。皇帝も察知しブラウンシュバイク公爵へと捜査を命じたが、一歩及ばず暗殺が成功してしまう。
事態に気づいたブラウンシュバイク公爵は帝都を封鎖。シュタイ

ンホフ派部隊の蜂起を未然に阻止して都内の治安を維持したうえで、新無憂宮へ突入。皇帝の遺体を盾にとったリヒテンラーデを拘束したのであった。皇帝の骸を目にしたブラウンシュバイク公爵は「義父上の信頼に応えられなかった、かくなる上はヴァルハラへお供致す」と近衛のサーベルを引き抜いて自らの頸へ当て泣き崩れ、近衛たちに一時拘束されたとされる。その大袈裟さに演技であるともされるが、多くの史書で「ゴールデンバウム最後の忠義もの」と公爵が評されるゆえんだ。

同日正午には全チャンネルで皇帝の崩御とエリザベート女帝の即位が宣言。臨時宰相となったブラウンシュバイク公爵は「恩赦」の形をとり同盟に対する全戦線での攻勢中止を命じた。一日後にこの放送に応じる形で同盟も攻勢を停止。百年ぶりに両勢力間での砲火が途絶えることとなる。また、公爵は行政改革として「ご一新」を発表。「劣悪遺伝子排除法」の廃法などが並んだ。文字通りそれは一新であり、「混乱のなかで紛失された」玉璽の更新とならび、ブラウンシュバイク王朝への移行を示すものであった。

かくして帝国暦四八七年一〇月一〇日は、ゴールデンバウム王朝最後の日――そしてブラウンシュバイク王朝最初の日となった。

ヨアヒム・フォン・ブラウンシュバイク伝

ヨアヒム・フォン・ブラウンシュバイク

ヨアヒム・フォン・ブラウンシュバイク（帝国歴四六一年一二月八日～五三八年一月二三日）はブラウンシュバイク朝銀河帝国初代女帝エリザベート・フォン・ブラウンシュバイクの配偶者、初代皇配、二代宰相である。軍籍を有し、ゴールデンバウム朝ではブラウンシュバイク元帥府参謀長、ブラウンシュバイク朝では無任所の国家大元帥であった。

帝国歴四六一年一二月八日、帝都オーディン中央病院にて生を受ける。出生時の名はヨアヒム・フォン・フレーゲルである。父は当時のブラウンシュバイク公爵オットーの弟、惑星ミュンヘンの領主ハインリヒ・フォン・フレーゲルであった。兄弟の仲は当時の門閥貴族としては異例なほど良好であった。伯父オットー・フォン・ブラウンシュバイクは息子がなく、実の息子のようにかわいがられていたと、と後に語っている。父は彼が一二歳のころ宇宙船事故で死去。以降はブラウンシュバイク一門衆の中で最若手の当主として伯父たちより薫陶を受ける。

幼年学校を卒後、准尉に任官し軍務省で勤務。事務官としての彼は人並みの有能さであったとされる。情報部に転属しフェザーン駐在武官を経て二〇才で准将として軍務省星兵総局参事官に登用。少将として予備役編入され以降はしばし領地経営に努めた。

人生に一度目の転機が訪れるのは帝国暦四八六年三月二一日、ブラウンシュバイク公爵オーディン邸で発生したテロ事件「クロプシュトック事件」である。継承権問題で帝都を追われたクロプシュトック侯爵が皇帝臨席予定の夜会で手荷物爆弾を起爆。高位貴族の死者四〇人以上を出す惨事となった。爆心地近くにいたヨアヒムは友人達に庇われ幸いにも軽症で難を逃れたが、この日を境に精力的に政治・軍事活動を開始する。

伯父にして寄り親のブラウンシュバイク公爵上級大将が指揮するクロプシュトック討伐軍に参加したヨアヒムは、それまでの貴族や一

門への甘さを改め、軍紀を徹底。のちにブラウンシュバイクの双璧と呼ばれるにいたるミッターマイヤー少将・ロイエンタール少将の指導の下参謀長として討伐を成功裏におさめる。

直後に発生した北門門外の変ではかねてより対立関係にあったミューゼル大将・キルヒアイス大佐の応援に元帥府警備部隊を率いて駆けつけ、以降はミューゼル大将の姉グリューネワルト伯爵夫人の館をたびたび訪れてラインハルト一家と親交を持ったとされる。

その後もゴールデンバウム王朝が行ったサジタリウス遠征に参謀長として参加。その功で大将へ昇進しており、元帥の甥という立場はあったものの、同様の血縁者が数十人いたことを考えると、やはり同輩のなかでも優秀であったことがうかがえる。

彼が軍人として最も活躍したのは一〇月一〇日事件である。サジタリウス遠征からほぼ一年後になる出来事で、当時国務尚書の地位にあったクラウス・フォン・リヒテンラーデと皇帝顧問官ウィルヘルム・フォン・リッテンハイム三世、そして彼らに利用された統帥本部総長ヨハネス・フォン・シュタインホフ元帥による皇帝弑逆とクーデターであった。元帥府は皇帝から直々に捜査を託され暗殺計画を探るも、一歩及ばず前者は成功させてしまった。しかし、後者たるクーデターはブラウンシュバイク元帥府の危機管理計画マニュアルを適用して部隊を動員、クーデター部隊が本格的に動き出す前に制圧に成功する。

甲斐あって、無事エリザベートはブラウンシュバイク王朝の初代女帝に即位。その父ブラウンシュバイク公爵オットーを宰相とした臨時政府を始動させる。従兄のヨアヒムは元帥杖を授かり、空位となった統帥本部総長の席に座った。

事件後はリヒテンラーデ侯爵一門の処刑に関与。リッテンハイム侯爵一家を西苑に幽閉するなどの後始末を差配した。吹き荒れた粛清の嵐は当時の貴族家の過半に及び、のちに内務尚書に起用されたその担当者の名から「オーベルシュタインの草刈り」と呼ばれている。相応の抵抗はあったが、それらは一〇月一〇日事件に関与した(と、捜査協力により罪一等を減じられたシュタインホフ元帥が証言した)宗

教団体「地球教」との戦いを経て陸戦畑出身者として初の軍務尚書の座を占めたオフレッサー元帥直属の装甲擲弾兵によってねじ伏せられていく。

また、同時期沈黙を保ったイゼルローン方面軍司令官ラインハルト・フォン・ローエングラム上級大将に対しては、その姉グリューネワルト伯爵夫人と親友ジークフリード・キルヒアイス大佐を使者として送った。ローエングラム上級大将は一時辺境の独立勢力となる野心と勤王家としての忠誠心の板挟みになり逡巡していたが、両者の説得により帰順を誓い、西苑の一角で仲睦まじく暮らしたという。この時宮廷内に彼らの居場所を置いたことをしかし、ヨアヒムはのちに後悔することとなった。

第二の転機が訪れたのは、女帝エリザベートからの求婚である。自分を「にいさま」と呼び、妹扱いをしていた従妹からの求愛により、爆破テロ以降浮世離れしていると見られていた彼が初めて慌てた姿を公でさらしたとされている。これを受け入れ、彼はブラウンシュバイクに婿入りする形で皇配ヨアヒム・フォン・ブラウンシュバイクとなる。

「殿下」と呼ばれ伯父の宰相職をゆずりうけて以降の彼は政治改革に力を入れ、旧弊を廃し貴族への国税の課税を行い、貴族家私財持ち出しの多い辺境への交付金の設立するなど中央集権化と全土の標準化へ力を入れた。以て帝国臣民を「誰誰家の臣民」ではなく「皇帝陛下の臣民」へと意識変革させることに成功し、帝国第二の黄金期を築いたとされる。軍は縮小されつつも元帥府提督らのもと星系探査に力を入れ、同様にロストコロニー探索を百年ぶりに再開した自由惑星同盟の深宇宙探索艦隊、通称ヤン艦隊などとともに人類領域の拡大に努めた。

宗教関連では「地球は人類のゆりかごでありその歴史は保存されねばならない」として地球教残党のうち融和派と交渉。彼らを「地球流刑」とし地球そのものは「帝国歴史保護区」の名目で発掘研究調査の場とした。予算は多額に投じられ、十字教など多くの宗教団体が各々の定めるところの聖地の発掘に参加する。元締めとなった地球教融

和派はのちに地球教過激派ともっとも強く対立する団体となる。
彼は愛妻家であり、後宮を持たずしてその子沢山でも知られたが、子の一人である第三皇女エミーリアはやがてローエングラム元帥と恋慕する。娘が恋する相手として彼を紹介した際は悲嘆に暮れ、彼を宮廷内へ出入りさせていたことを後悔したと史書は伝える。しかしながら、彼はその多子を最大限に利用しブラウンシュバイク一門の縁や高官との血縁関係を結び、帝国を安定させ現在へ続く土台を形成した。
彼の治世の始まりこそが、動乱と英雄の伝説の時代の終わり、歴史の始まりであった。